

1. 単元名(主題) 「研究活動の振り返り」

～生徒探究発表会の客観的評価に基づく成果と課題の分析～

2. 本時の主題の概要および設定理由

本時は、生徒探究発表会という大きなマイルストーンを終えた直後に行う、研究全体の「振り返り」と「研究成果の報告書への体系化」を主題とする。原則2コマ連続・100分の連続授業形態を最大限に活かし、前半は全体会(グリーンホールでの講評)によるマクロな視点での成果と課題の共有、後半は各自のテーマ別教室における個別発表面談と、共同編集ファイルを用いた研究報告書のまとめを並行して行う。

生徒は、外部評価や他者から得られた質疑応答のフィードバックをもとに、自らの研究の「成果」と「課題」を主体的に整理する。指導教員は、生徒が提示する6分間の発表に対してルーブリックに基づいた多面的な評価を行いながら、対話(問いかけ)を通して「学術表現の一意性」「背景変数の制御」「社会的文脈の深掘り」といった高次の学術的視点へと引き上げる伴走支援を行う。これにより、生徒がこれまでに蓄積した探究プロセスを単なる活動で終わらせず、『研究計画書兼報告書』として論理的に言語化・統合させ、次週以降の「研究要綱」執筆に向けた確固たる基盤を形成するために本主題を設定した。

3. 本時の目標

- 1) **研究活動の多角的分析とメタ認知:** 生徒探究発表会での質疑応答、外部評価、および全体講評を振り返り、自らの探究における成果と課題を時間軸(過去・現在・未来)に沿って多角的に把握する。
- 2) **客観的評価に基づく研究報告書の精緻化:** 発表会での指摘や議論を踏まえ、『研究計画書兼報告書』の「研究結果」「考察・結論」「今後の展望」をチームで協力して加筆・修正し、論理的整合性の高い内容に仕上げる。
- 3) **対話を通じた探究活動の深化と自己管理:** 指導教員への発表および伴走面談を通じて、自らのリサーチクエスチョンや検証方法に対する「言葉の一意性」や「背景変数の配慮」を再認識し、研究倫理や期限遵守、誠実な信頼関係といった研究者としての責任感を身につける。

4. 本時の準備・使用教材

- 教員用提示資料: 『SSⅡ-第24回スライド』
- 使用教材(副教材): 『課題研究メソッド 2nd Edition』(岡本 尚也/新興出版社啓林館/2021)
- 共同編集用ファイル: 『研究計画書兼報告書』
- 授業内提出課題: 『振り返りフォーム』
- 教員用管理資料: 『教室別名票』(各教室の担当教員に配布)、『HR別名票』
- 共通参照資料: 『高2 SSⅡ学習の手引き』

5. 本時の展開(100分)

【ゼミコース・ラボコース共通】

時間	学習活動	指導上の留意点・教員の支援
10分	(1) 全体講義: 生徒探究発表会の振り返りと講評 - 講堂に集合し、着席する。 - 提示されるスライドを視聴しながら、探究担当教員・指導教員からの全体講評を聴く。 - 発表会における「成果」(エビデンスの確保、独自の指標作り、多角的な論理構築、情報デザインと発表態度)を再確認する。 - さらなる「高み」を目指すための「課題」(学術表現の一意性、研究設計の妥当性と背景変数の考慮、社会的文脈の深掘りと社会への貢献、および誠実な信頼関係の構築)を認識し、自身の研究態度や成果物と照らし合わせる。	- 探究担当教員が登壇し、生徒全体の成長(地道な実験や調査の努力、曖昧な概念の指標化、発表姿勢の向上等)を具体的な事例を交えて大いに賞賛し、生徒の自信を醸成する。 - 一方で、より高度な学術レベルを目指すために不足している要素を提示し、今後の探究活動に必要なマインドセットを促す。 「100人中100人が同じ意味に捉えられる言葉」の追求 - 自然科学における変数制御や人文社会科学における多角的な背景への疑い - 社会課題解決への具体的貢献性など - 研究活動が「周囲との信頼関係と誠実さ」の上に成り立つものであることを、提出物期限の遵守や指導教員との報告・連絡・相談(報連相)の重要性と絡めて厳しく指導する。
10分	(2) 教室移動・環境のセットアップ - 各教室にて指導教員による出欠確認を受ける。 - 各自の端末(Chromebook等)を起動し、Classroomから配信された「振り返りフォーム」および『研究計画書兼報告書』の格納フォルダを確認する。	- 入室を確認し、迅速に出欠を把握する。 - 後半の個別活動(発表面談と個人・チームワークの並行実施)の進め方について簡単に説明し、生徒に活動の見通しを持たせる。
70分	(3) 指導教員への発表および個人ワーク A. 指導教員への発表(順次実施) - 割り当てられたタイムテーブルに従い、指定されたチームから、各自の端末を指導教員に提示しながら、生徒探究発表会当日と同じ発表(6分)を行う。 - 発表後、指導教員からの評価や多角的な問いかけを受け、自らの発表内容・研究内容の客観的な弱点や今後の改善点について把握する。 B. 個人ワーク(上記A.の時間外) - Classroomに配信された「振り返りフォーム」を記入し、送信する。発表会での気づき、質疑応答で得られた質問やアドバイス、新たに生じた疑問を時間軸(過去・現在・未来)に沿って整理する。 『研究計画書兼報告書』をチームで共同編集し、「(5)研究結果」「(6)考察・結論」「(7)今後の展望」を加筆・修正する。発表会での他者からの指摘を踏まえ、研究成果がどのように社会や学術に貢献するかを論理的に記述する。	A. 発表ルーブリック評価の実施(最優先) - 教室内の複数の教員でチームを分担し、あらかじめ設計したタイムテーブル(1チーム10分:発表6分、入れ替え・質疑等4分)に沿って同時並行で発表を聞く。 - 発表を聞きながら、ルーブリックの5項目(背景と意義、問いと仮説、方法の妥当性、解釈と考察、デザイン性)に沿って客観的に評価し、スプレッドシート(評価入力シート)へリアルタイムに入力する。 - 指導に際しては、答えを提示するのではなく、「この用語の定義は一意に伝わるか」「検証条件以外に影響した背景変数はないか」「この成果は社会のどの部分に貢献できるか」といった問いかけを行い、生徒の自発的な気づきとさらなる高次の探究への移行を支援する。 B. ワークの巡回および記述支援(時間があれば) - 上記A.以外の時間において、生徒が主体的に「振り返りフォーム」への回答や報告書のまとめを進めているか巡回・指導する。 「(1)～(4)(研究手法まで)」が未完成のグループには、これまでの進捗を早急に整理するよう促す。 「(5)～(7)」の執筆においては、単なるデータの羅列に留まらず、発表会当日の質疑応答を踏まえて、次週以降の「研究要綱」の記述を意識した高い質でまとめるよう指導する。

5分	(4) 活動の省察と次回タスクの整理 「振り返りフォーム」の送信完了を指導教員に示す。 - 次回から始まる「研究要綱」の執筆プロセスの手順を理解し、本日作成した報告書との関連性を把握する。	- 全生徒が「振り返りフォーム」を確実に送信完了したかを巡回やシステム上で確認する。 - 本日のワークでまとめ上げた『研究計画書兼報告書』が、次週から本格的に執筆を開始する「研究要綱」の土台となる極めて重要なドキュメントであることを周知し、次週の活動に向けた見通しを共有して授業を締めくくる。
----	--	---

6. 参考資料

【生徒探究発表会・評価ルーブリック(5項目)】

	課題の背景と意義への理解	問いと仮説の適切性	研究方法の妥当性	結果の解釈と考察の妥当性	視覚的表現のデザイン性
レベル4	知的好奇心と社会背景が結びつき、多角的根拠で意義を示す	先行研究に基づき本質を捉えた独創的で検証可能な仮説を設定	最適な方法を比較検討し選択、手順を具体的にかつ明確に説明	複数視点で客観的に分析し、研究の課題と今後の展望まで言及	図表・配色を緻密に設計し、要点を強調して説得力を高める
レベル3	意義は説明できるが、自身の問題意識との繋がりが不十分	検証可能な仮説はあるが、先行研究調査や独創性に課題あり	適した方法を選択できているが、選択理由の吟味が不十分	論理的な考察はできるが解釈が一面的で、課題の分析に至らず	図表を用いて整理されているが、重要情報の強調が不十分
レベル2	意義の説明が抽象的で、なぜ自分が取り組むのが不明瞭	仮説はあるが論理的根拠が弱く、検証方法が不明確	方法は示すが手順の説明が曖昧で、誰でも実施できない	結果の説明はできるが考察不足で、単なる結果報告に留まる	図表はあるが配置や情報量の調整が不適切で理解しにくい
レベル1	研究の意義や問題意識に至った背景が説明されていない	検証可能な仮説として具体化されず、研究の軸が不明確	方法が仮説検証に繋がらず、信頼できるデータを得られない	結果と意見が混同し、客観的事実に基づく考察がない	文字中心の構成で視覚的工夫がなく、理解を妨げている
評価の着眼点	先行研究や社会課題の背景を多角的に分析し、研究の「新規性」や「社会的意義」を説明できているか。	設定したリサーチクエスト(RQ)が具体的であり、論理的かつ検証可能な仮説が立てられているか。	RQの解明に向けて、客観的なデータ(質・量ともに十分なエビデンス)の収集手法が適切に設計されているか。	曖昧な概念を「共通の物差し(指標)」に数値化・可視化して落とし込み、先行研究と紐つけて論理的な解釈を行っているか。	発表資料(ポスター・スライド)の情報の見やすさ、聞き手の認知負担を下げた構造設計、および熱意を持った堂々たる発表姿勢。

【研究報告書・最終点検チェックリスト((5)～(7)の加筆・修正時)】

生徒が共同編集ファイル『研究計画書兼報告書』を記述する際、教員が巡回しながら以下のチェック項目をもとに指導する。

☐ (5) 研究結果

- 実験結果や調査データが、誇張なく客観的事実として図表等を用いてわかりやすく記述されているか。
- 主観的な感想や結論を結果の段階で記述していないか。

☐ (6) 考察・結論

- 得られた結果から、論理的にリサーチクエストの「答え」が導き出されているか。
- 先行研究の知見と自らの結果を対比させ、多角的な視点から「なぜこの結論に至ったのか」の裏付けがなされているか。
- 結果と考察の間に飛躍や矛盾がないか。

☐ (7) 今後の展望

- 本研究で解決できなかった課題(次なるリサーチクエスト)が明確に述べられているか。
- 自分の研究成果が、現実の社会や学術にどう貢献・還元できるかの具体的な「出口」が示されているか。